

イナウーその1

イナウ(御幣、木幣ともいう)はアイヌ民族の祭祀や日常生活に欠かせないもので、その作り方や種類、用途



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

の音 -eが落ちる)、沢山の枝があるものという意味の一つの言葉になったのではないかと考えられています。

は数限りなくあります。本稿ではとても書ききれませんが、イナウなくしてはアイヌ文化について語れないほど大切なものなので、ごく基本的なことについてご紹介します。イナウを削りかけ、削り花ともいうことからわかるように、木の枝の表面を薄く削って作ります。刃物でなければ薄く削るのは難しいので、今もみられるイナウが作られるようになったのは、大陸や本州(紀元前3,500年以來)から金属器が入ってきてからのことだと思われます。イナウによく似た削り花は、古くから日本各地でも作られていました。神社の儀式で玉串として奉納される櫛の枝や白い紙でできた御幣の原型はイナウであった可能性が高いのです。最新の研究結果では、アイヌ民族は遺伝子的には、縄文人に最も近いことが確かめられていますのであり得ることです。イナウに似たものは世界中に存在しているため、その語源には諸説あります。サハリンに居住していた、アイヌの人々がオロッコと呼んでいたウィルタ族のイナウ類似の祭具である「イッラウ」がアイヌ民族に伝えられたという池上二郎氏の説が有力ですが、イッラウには目、鼻、口がついた顔がある点でアイヌのイナウとは異なりますし、ウィルタ族が使用する数多い祭具の一切は、アイヌ民族に移入された形跡がほとんどなく、その使い方も伝わっていません。このためイッラウがアイヌ民族に伝わりイナウになったとは考えにくいのです。「削り花」の記録は全国に数多くあり、九州ではたい肥の神とされていたそうです。藤村久和先生は、イナウはアイヌ語のインネ(inne-沢山の)とアウ(aw-枝)が一つの言葉になり(アイヌ語では子音が重なるとその一つが消え、母音が重なると前

イナウに使われる木としては、扱いやすい柳やミズキが一般的です。それ以外では樹皮の色が黄色いキハダ、クルミ、ナナカマド、サクラ、タランボ、ハリギリ、ホオノキ、ニワトコなども使われます。使う木は用途や捧げる神によっても異なります。例えば、接骨木の別名のように、折れた骨の接合に効果があるとされ、葉や実は食用にもなるニワトコの木は、葬儀で使われ、墓標を作る地域もあります。ニワトコはアイヌ語ではオソコニ(o-そこにso/si-糞kor-持つni-木)、ソコニ、ソコンニなどと呼ばれ、名前に現れているように独特の臭気があり悪神が嫌うとされます。心正しい者は臭さを感じず、魔性に憑かれやすい、心正しくない者には大変臭く感じられるそうです。

イナウの果たす役割ですが、イナウ自体に超自然的な力があるわけではありません。アイヌ民族の考え方では、全てのものに魂があるので、イナウが完成すると魂も誕生し、イナウへ人間の願いを伝えることを使命とさせることにより、願いは神々に届けられるのです。イナウは、言わば神様に思いを伝えるコミュニケーションツールのようなものです。アイヌの人々は祭祀がある場合はもちろんですが、諸々のお願いごとをするとき、漁で魚が捕れたり猟の獲物を授かったとき、何かを願いまた願いがかなったときなどさまざまな場面で心を込めてイナウを削り神様に捧げました。また地理的に難所と考えられる場所では、そこを司る神様のためにイナウを作り、通行の安全を祈りました。岩内郡共和町と余市郡仁木町を結ぶ国道5号線の稲穂峠の「稲穂」はイナウに由来しています。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び、実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和4年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~14』(北海道教育委員会、2008~2023年)等。